

---

# Chase Dream

苑流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C h a s e   D r e a m

### 【Nコード】

N 2 6 4 7 D

### 【作者名】

苑流

### 【あらすじ】

それは突然やってきた。アルルたちに訪れる惨劇と挑戦。それに立ち向かう仲間たち。死にゆく者、生きる者、サバイバル戦の結果はいかに・・・？

## プロローグ（前書き）

この物語は魔導小説の『ぷよぷよ』を題材に製作しております。内容は自作ですが、キャラ名は引用しております。一度はキャラ画像を公式サイト等で見ていただければ、内容がより一層わかりやすくなるかもしれません。

基本、話の展開は早いですが気にしないでください（笑）

## プロローグ

一つの力を得るために、人々は善悪問わず行動してきた。

ある者は戦いに敗れ、ある者は人質になり、また別の場所の者は地味な努力を重ねる。

そういう時代もあった。だが今は違う。手段を選ばず行動することに不信感や罪悪感を覚えた人々は破壊活動を止め、

だれもが住める国にしようとし、国を変えた。その変わった街の一つ、『スカイサーズシティ』に、一人の少女がいた。

彼女の名は、アルル・ナジャ。

## ブログ（後書き）

<http://homepage3.nifty.com/yuu-sha-kaz/kaz.htm>

こちらが本家です。どうぞよろしく。

## 第1話：始まりの時

やあ、みんな。ボクの名前はアルル・ナジャ。魔導学校6年生で十二才！

魔導学校っていうのは、簡単に言えば魔法を使える人たちが集まる場所さ。

ボクもその一人。この世界は全員がつてわけでもないけど半分ぐらいの人が魔法の力、すなわち魔力を持っているの。

超能力とは違ってそれぞれ違う魔力を持っているんだ。先生は昔、大きな力が解き放たれたから今ボクたちが魔力を持っていると

いつていたけど詳細はわからない…。まあ誇りに思うべきなのかな。そついうわけで、今日も毎日と変わらない日々を送り続けている。

今ボクは平らに続くアスファルトの道を通りながら登校中だ。

「よっ！」

後ろからポンと肩を叩いたのは同じクラスのシェゾという少年だ。変わっているのは名前だけじゃなく、

容姿や性格も大分変わっている。勿論、変態的な意味でね。彼のことをもう少し詳しく話すと…

本名シエゾ・ウィグイイ。別名『変態魔導師』。銀の髪に青い瞳。剣を扱う魔導師。シエゾの紹介は以上！

「ん？今オレのことなんか言っただけ？」

紹介したのだからそうであろう。とは言わないが…

「まあいい。それより聞いたかよ？昨日のニュース。」

あいにく昨日と限定されてもパツとは出てこないさ。

「また街一つなくなっただけだぜ」

ああ、最近聞いていた気がするね。魔導師が集う街が一晩で消されているとか。死者はいないみたいだけど。

「それがさ、昨日消された街は隣のチュベンタウンだってよ。」

「隣かあ…ボクらの街にも来ちゃうのかな？」

「来てもオレが阻止するぜ！まあこないに越したことないけどさ！」

偉く強気だね……。实力はボクと同じくらいなのに…。

「うっ、うるさい！まあ先生もいるから大丈夫さ。」

今度は弱気な……。学校登校中に男女二人が並んで歩いているとてつもなく誤解されそうだけど、決してそのようなことはないからね！

読者のみなさん、わかってください！

とはいえ、やっぱり誤解されるよねえ。今度からシエゾがきたら逃げようかな。

「それって、俺がストーカーみたいになっちゃうじゃないか！」

だって事実そうだし…。なにかある度に『お前が欲しい』という人がストーカーや変態でない理屈はないはず…

「いや、だからな。それはお前の…。」

あ、学校についた。



「逃げるなああ！！」

僕はとりあえずシエゾを置いていく形で教室へ向かった。

僕らの使う教室は今の日本の学校の教室の広さはなく、入れて二十人ぐらい。

一クラスの人数も十人程度だからそのくらいの広さで済むんだ。入り口はちゃんと二つあるんだけどね。

僕はその後ろのドアから教室に入った。教室につくと数名が集まって何やら話をしていた。

「えゝホントゝ？」

小さくて可愛い声を出しているのはアーちゃんだ。本名はアーチだからアーちゃん。

弓の使い手でいつも陽気な性格。一緒にいるだけでも楽しい子さ。

「あら、アルル。あなたもきなさい。」

女王のような声をだしてきたのはルルー。青い長い髪に青い瞳。言葉遣いは女王のようである。

なぜ……と思うかもしれないが、彼女の实力はだれもが認めてしま  
うのさ。

「紹介なんていいのよ！とにかく昨日のことよ！あなたはどっ思っ  
ているの？！」

「え、昨日のことって何？」

別にシラを切っているわけじゃなく、僕は本当になんのことを言っ  
ているのかわからなかった。

「もう！ホント鈍感ね！私がよくお出かけにいつて遊んだりもし  
たチュベントウンがなくなったことよ！」

なぜ十二歳が隣街まで足を運ぶのかという質問は避けておこう。後  
が怖い…。

「もしかしたら次は私達の街にくるかもしれないのよ？」

「来て欲しくはないけど、来たらシェゾが倒してくれるらしいよ。  
先生もいるから大丈夫かなあって。」

さつきシェゾが言っていたことがふと頭によぎった。まあもともと当てにはしてないけど…。一方でシェゾは得意気な顔をしているがそこに重い一撃。

「変態魔導師には期待してないわ。」

みんなが頷く。この上なく落ち込むシェゾ。残念だけどボクもみんなに賛成するよ。

「でも、他の街も多少なりと学校はあるはず。その先生の力で抑えられなかったんだから……。来て欲しくないよね。」

ごく普通の意見を述べたのはウィッチ。日本訳だと魔女だけど……。黄色い髪で杖を持つ少女。性格はかなりシツコイけど……。

「あれ？先生は抑制しようとしたのに死者はいないの？」

ふと自然な疑問を僕は言った。

「気絶つてことで死んではないなのよね。重症つてわけでもないみたいだし…ま、来ないに越したことはないですわね。」

意見と解答自分流でまとめたのはやはり、ルルー。まあいいけどさ。区切りのいい所でお馴染みのチャイムが鳴った。

一時限目開始の合図だ。みんなが席につく。このクラスは女の子六人、男の子三人の九人という少人数クラスだ。

この学校自体、女の子の人数が多いので、この人数差はしょうがないといえましょうがない。それぞれの名前を挙げると、

まずは女の子から女王のルルー、魔女のウィッチ、弓使いのアーちゃん、妖精のチコ、人魚のセリリと特に属性のないボク。

男の子は変態のシェゾ、同じく変態動物のラグナス、そして笛吹きのパノッティ。みんな六年間同じクラスさ。

僕らの学年は一クラスしかないんだもの。みんなが席についてから数分後に先生が教室の前の方のドアを静かに開けて入ってきた。

名前はユージ先生。男の先生でちよつと日本人っぽい名前だけど、気にしない！

「授業を始める前に少し違う話題から入ろうか。」

なんとなくみんなは予想がついていた。何せ、授業前から話題になっていたのだから。

でもよく先生もみんなも知っているよね。そんなに有名だったのかな。

「みんなもご存知の通り、昨日一日で、隣街がなくなってしまった。本当はみんなを学校に連れてくるのは危ないのだけれども、

みんな親がそばにいないから学校のほうで安全だと判断した結果、しばらく学校に留まるかもしれないが、その辺は我慢してくれ。」

そう、ここにいる八人は親がいないのだ。唯一いるといえばウィッチであるが、彼女の母ウィツシュも行方不明だし、

ボクは親さえ知らない。唯一身内のことで知っているのは、お兄ちゃんがいること。

けどボクが物心つく前に家からいなくなってしまい、名前も顔も覚えていないんだ。

「街を消しているのは同一犯のようだ。少しでも不審な人を見つけたら無理をせずにすぐに助けを求めてくれ。」

特にルルーとシェゾ、君らが一番危ないから念押ししておくぞ。」

「わっ、私は大丈夫よ?!。」

「俺もそんなことはしないぞ?!。」

実に説得力のない言葉ではあるが、しょうがないか。

「みんなもいいな？」

「はい。」

みんなも同じことを思っていたらしい。まあそのようなことがあったとしても、すぐに逃げるだろうけどね。

さてさて、こちらの授業の多くは魔導に関する授業だ。午前三時間午後二時間の計五時間。

魔導中心の授業構成だとうんざりしそうだが、そうでもなく実技、筆記もある。

また体育という名目の授業もあり、生徒同士の対戦や、校外授業といったこともやるんだ。

けどそれだけじゃやっぱり馬鹿になる一方だから、数学や国語の授業や試験もある。

僕はといえば、試験や実技などは並にこなせている方の生徒だとは思うけど…。

まあ成績もそのぐらいだしね！今日の時間割といえば数学、国語、魔導講座、体育、体育。感想的には普通だけどね。

まあみんな僕と同じような感覚はもっていないらしく、シェゾやルルは必習科目になればすぐに寝てはおこされるの繰り返し。

シェゾに関しては体育以外動いているのを見たことがない気がする…。体育の成績は学年トップだけど…。

「さてと。」

ふと一息。今は三限目が終わってお昼タイムに入ったところ。弁当持参と学校支給の二通りの昼食があるけど、僕らはたいてい後者の方を選ぶ。

「んと…今日のメニューはっと…。」

ずらっと並ぶメニューをみているうちにシェゾが介入してきた。

「アルル、一緒に食べようぜ。」

シェゾじゃなければ素直に喜べたが、なにかもどかしい…。

「食つやつがないんだ。なっ？」

そんな同意を求められても…。なにか友達がいなくてもとれるし、仕方ないから僕というふうにもとれる。まあいっか。

「よし、じゃあ席とって待っているぜ。」

両手に持つオボンの上に特盛りのカレーライスを持ちながらシェゾは席をとりに行った。ん〜じゃあ僕もカレーにするかな。

全く今日の朝からなんでシェゾと二人という光景が多いのだろうか。まるで本当に誤解されそうだよ…。

そんなことを頭の隅に置きながら、中辛のカレーを僕はパクパク食べていた。

そういえばカレーが好きになったのって幼稚園の時ぐらいだったかなあ……。

今家にいるカーくん（カーバンクル）もカレーが好きになったのはその頃だし…。

あの時はお兄ちゃんがカレー作っていたんだっけ。僕は手伝いをしていたっけ…。なんかドジ踏んでばかりだったけどなあ…。

そんなことを考えているうちに他の声が介入してきた。

「どうしたアルル？浮かない顔してるぞ。」



顔に自分の考えていることが出ていたみたいだ。

「うん、ちょっと考え事をね……。」

「兄貴のことか？」

昔からの付き合いだけあって白銀の髪の持ち主の勘は鋭かった。

「カレーのことで少し思い出していたんだ。でも……あれほど好きだったお兄ちゃんがなんで家をでて行ったのか……。今もわからないんだよね。」

「理由もなく妹を見捨てるとは思わないな……。」

シェゾは掛ける言葉を必死に探していたが、これが精一杯であった。

「ごめんね。こんな話して……。」

「いや、いいさ。それよりカレー食おうぜ、カレー。」

## 第2話：見えないもの

昼食を食べ終わった僕らは体育の準備をしに教室へ向かった。着替える場所は教室ではなく、

男女別の更衣室。体操着は男の子は白の半ズボンに白の半袖。女の子は半ズボンより短めの黒ズボンに上は同じ。

一年中同じ格好だから冬が寒すぎるんだよね。

「シェゾ、覗くなよ。」

僕は一番危ない生徒に毎回言うセリフを言って更衣室へと向かった。女の子の更衣室といえば、

なぜか男の子が入りたがるけど、そんな興味をひくものがあるかなあ？ロツカー式だし…。

（いや、着替えているところをね。）

それってただの変態じゃ………そんなにみたいならルルーとかならしてくれそうだけど。

（ルルーじゃなあ……。）

全国のルルーファンに申し訳ない言い方だよ、それ…。

（か弱き子こそ…）

ロリコンかい！作者は！

（誤解を招くことを言うんじゃない！か弱き子さ！）

はいはい、か弱き子ね、か弱き子。全く…。

か弱き子でない僕は早めに着替えてグラウンドに向かった。今日の体育の授業はどうやら体力測定みたい。

幅飛びとか握力とかありきたりなのと、プラスアルファで魔力測定とかとか。これも至って僕は標準値だけどね。

「今日は体力測定かあ…。」

ニヤニヤしながら言葉が浮いているのはシェゾ。体育が得意だけに自信満々だ。ああ、疲れるなあ…。

とまあ、シエゾが学校新記録だしたり、ルルーが抗議したり、セリリがなかなか始めなかったりでなかなか大変な体力測定だった。

中でもアーちゃんなんか学年が一つ下なだけあってもつと面倒見が大変で…。アーちゃんは五年生だけど学年で一人しかないから

六年生の僕らと混ざっているのさ。頭は僕よりいいのがなんともいえないけど……。

「ああ、授業が終わったらみんな少し残ってくれ。」

ユージ先生がそう言葉を残した。なにかするのだろうか？

「うん、まあちょっとホームルーム的なことをな。」

なるほど。気になるっていえば気になるなあ…。

「俺凄かったろ？」

空気の読めない変態が介入してきた。

「そつだね。」

空返事で答えたのがよくなかったらしく、空気の読めない彼がさらに会話を続ける。

「なんといつてもこのシェゾ様に体力面で勝て……。」

ふう、馬鹿はほっておいて着替えるとするか。

放課後、クラスのみんなは自分たちの教室に戻り、先生を待った。

「ホームルームってなんだろう?」

確かに気になるよね。アーちゃんが聞くんだから僕も疑問に思ってもいいだろう…。

「ホームルームってのは先生が生徒を集めて伝えたいことを言う授業さ。」

ああ…今日は変態が絶好調のようだ。みんなは無視の方向らしい。

「街消滅と関係があるんじゃない?」

なるほど。それが一番あり得そうかな。

「全くだ。」

僕らの輪の外から聞こえた声はユージ先生。この人は本当に気配がないなあ…。

「全くもってその通りだ。詳しくいえば、事態の收拾がつくまで学校に留まるという方針になった。」

どうしても家に戻りたいやつは明日以降先生にいつてくれ。みんなでついていくからな。」

ある意味嫌だけどうかがないか…。ルルー女王の家も見てみたい気がする。

「とりあえずホームルームは以上である。」

一分もたっていないような…。

とまあそんなこんなで学校に留まるようになったわけだが…。こういう時にどのようなことをすればいいのかさっぱりわからない。

「よし、なにをしよう?」

「遊び。」

「散歩。」

「いじめ。」

「スカートめくり。」

色々つまあ意見が…。白髪の剣士はルルルの鉄拳をくらっていたけど。

「アルル、あなたはなにがいいの?」

うーん、散歩あたりがベストなんじゃないかなあ。

「じゃあ、それにしましょ。」

あ…あれ？僕の意見でいいの？って、みんなの意見聞いた意味ないじゃないか！

というわけで、みんなで散歩することになった。唐突過ぎるけどね・・。

「やっぱ外が一番ですわ。」

杖に乗って楽しんでいるウィッチがより楽しそうに言った。僕に任せたくせに呑気な…。

まあ、それはそれでしょうがないかな。けどウィッチ。ひとつだけいい？と、ここで僕の思いを伝えてみる。それは…、

『歩けよ。杖に乗ってないでさ。ただでさえ疲れるのに…。』

ということをお願いしてみたが、むなしくも叶わず、以後、彼女が杖



から降りるといことはなかった。これで太らないというのが、

ちょっと全国の女性を敵に回しそうな事なんだけど……。

「あゝ、あれな〜に〜?」

こここのところ発言がなかった、一個下の彼女が口を開いた。そして声を出すと共に、ある方向に指をさしていた。

みんな、アーちゃんが指差すほうを見る。そこには……、うん? よくみえないけど……。あれは何だろう?

なにかキラキラしている棒状のものが落ちている。近づいてみるとそれは単なる笛であった。

「なんで不用意に笛なんか落ちているのかしらね?」

確かに。まあ誰かの落とし物なのかな。そう考えれば納得はいくけどね。

「なにか彫ってありますわ。」

ウィッチが笛になにか文字が彫られていることに気づいた。

その大きさは読み取れる範囲の文字だった。

「てい・・・、てい・・・る・・・ところどころ抜けていて読めないわ。」

ルルーが必死に解読しようとするが、それ以上は読めなかった。でも一体なんでこの学校内に笛が落ちているんだろう？

学校関係者や生徒達の中で『ティ』という文字が連なっている人なんていないし・・・

ましてや、学校関係者以外は立ち入り禁止なのになんで校内に関係のない人のものが落ちているのだろうか？

「ま、悩んでも仕方ない事ですわ。」

ウィッチがこの場の空気を初めに割いた。

「そうね、でも、落とし主が落としたことに気が付けばこの学校に取りに来るかもしれませんね。」

ここはひとまず、預かっておきましょう。」

ルルーがまとめた・・・。かに思えたが、勘の鋭いこの子がまた言

った。

「あ、あそこにだれかいるう〜。」

またまた指をさしながらアーちゃんは言った。この子は本当に鋭いなあ……。アーちゃんが示す方向には確かに人影があつた。

しかし、遠くてだれなのかはわからない。

よくよく考えてみれば、この校舎内に隠れるようにして僕らを見ている人がいたら、それはとても怪しい人なんじゃないかな……。

そんなことは後で気づくことになるのだが、その時の僕らはみんなで一斉に近づいていった。

近づいてみてもなかなかその人は動こうとしない。だが、なかなか顔はみえない。こんな妙な状況を吹き飛ばす出来事が起きた。

カチッ。

何かの音がした。その瞬間。

「あっ！」

音と声と同時に人影も走り出した。人影が走り出すと同時にみんなも走り出す。不審すぎる……。

一体だれなんだろう……。こんな場所にいるなんて……。

そんなことを考えているうちに、僕らは既に学校の外にでていた。どうやら、学校の庭を越え、門を越え、

今日シエゾと会ったところまで来てしまった。しかし、人影を追うことは結局は無の努力となってしまった。

「はあ、はあ、結局見失ってしまいましたね。」

ルルーが息を切らしながら言う。こういうとき、杖に乗っているウィッチが一番スピードを出せるように思えるが、

本人いわくあんまりスピードは出ないらしい、でて二十キロ程度とか。

「一体だれだつたんだ？」

闇の貴公子ともいわれるシェゾが言う。だれもその問いに答える事はできなかった。

「でも、怪しい人ですわね。こんな時間に私たちのことを見ながらうろついているなんて……。」

もつともな意見だ。その時僕の頭には今日の朝の話がよぎった。

まさか……。でもそんなことは考えたくもない。ましてや、人前に姿を晒すようなことはしないだろう。

「とにかく疲れた。」

一番何もしていないウィッチが言った。なんでウィッチが疲れるんだろう……。

みんなと一緒に走ったらついてこれないんじゃないか？という疑問が起こるかもしれないが、

実はこうみえてもウィッチは体育の持久力の成績が上位なのだ。これでは文句のいいようもない。

とりあえず僕らは一休みすることにした。

ただでさえ人口が少ないスカイサーズシティでは、道の真ん中で寝転んでいても、邪魔扱いされる事はない。

幸いそのような人はいなかったが、都会だと邪魔扱いされそうな形で僕らは留まっていた。

（みんなは真似しちゃだめだぞ。念のため。）

「あ、これなんだろう？」

物探し名人といってもいいほど、よく落ちているものを見つけるアイちゃんはキョトンと

可愛らしい目をパチクリさせながら言った。そこには……一枚の紙切れがあった。

「ただの紙切れみたいだけど……」

そういつて僕は丸まっている紙を手に取り、中を開けてみた。

「これは・・・？」

どこかでみたことあるような…なんだろう？ああ！喉まででかかっているのにもどかしい！

「楽譜じゃない？これ。」

僕の悩みを一瞬で打ち砕いた。その言葉が出てこなかったんだよね…。

だが、楽譜といえるほどちゃんとしたものではない。読めるかどうか微妙なものであり、ト音記号やヘ音記号のマークさえ書かれていない。

「笛といい、楽譜に似たような紙といい、なにか音楽と関連してるのかな？」

今日初めて口を開いたのはチコ。見た感じ妖精っぽいけど、単に言えば可愛い女の子。魔法の数は多いらしいけどね。

「音楽といえば、パノッティ。あなたこの楽譜読める？」

パノッティはいつも楽しそうに笛を吹いている男の子だ。だけど笛の上手さはどれくらいか？というとあんまり上手くない……。

むしろボクのほうが上手く吹けそうだけだね！

「うーん、みたことないなあ……、仮に記号をつけたとしても読めないし……」

やっぱり楽譜ではないのだろうか？けど笛が落ちていて、楽譜らしき物も落ちている。

ってことから関連付けるとやっぱり楽譜という結論にたどり着くよな気がする。

うーん、なんだろう。この妙な違和感は。一回どこかで見た気がするけど、わからないかな……。

「あれこれ悩んでもしょうがないわね。帰りましようー！」

ルルーが元気よく言った。たしかにそうだね……。悩んでもしょうがないしね！



少しもどかしさが残るものの、僕は学校へ向かおうとした。だが  
次の瞬間、そのもどかしさはすっかり消えることとなる。

### 第3話：失うもの

もどかしさが消えたのは、たった一つの声から始まった。

本当にそれでいいのかな？

エッ？！みんなが振り向く。だれが今話しかけたの？だがここに  
いる全員は同じような顔をしていて、同じ疑問を抱いていた。

さらにその『声』は続く。

もはや帰る場所などない。君らはもうこの試練から逃れられないの  
だ。

「なっ、なにを言ってるの？！」

ルルーが思わず声に出した。すかさず、反応してくる『声』

ルルーといったな。

その低く恐怖に満ちた『声』はルルーの足を止めさせる。見るから  
にルルーは何かに怯えているような感じだ。

確かに説得力のない発言だな。

その場にいる九人が凍りついていた。なにをすればわからないのと『声』の恐怖に縛られているからだ。僕も例外ではなかった。

では、説得力を持たせてあげようか。みるがよい。

それは、低い声から放たれた呪文であつた。

ジガ・オル・ストリーム

その言葉を聴いた途端だれもが言葉を失った。なぜかって？だって…

「学校が・・・」

「え、なんで・・・」

学校がなかったんだもん。

目の前にあったはずの学校が、跡形もなく消し飛んでいた。庭も校舎も。なにかもが灰も残さず消えていた。

ククク、これでわかったであろう。

「ふつ、ふざけるんじゃないわよ！パワーストライク！」

パワーストライク。武道派の術の一つ。感情によって威力が異なる技である。ルルーの手から放たれたその呪文は勢いを増して飛んでいた。

無駄だ、今私は君らの近くにはいない。だが直に会えるだろう。

力一杯唱えた呪文は虚しく消えていった。

「クッ・・・。」

近くにいないのにどうやって話しているかなんて、どうでもいいことだった。ただでさえ震え上がる僕らと比べ、ルルーはかなり勇敢

に行動している。

そして、アルル・ナジャ

「……エツ？」

不意をつかれた言葉に、どんな反応をしていたかは定かではない。

お前が来る日を楽しみしているぞ。

「なっ、なぜ?!」

僕の問いには答えてくれず、声の主は闇のように消え去った。

「くっ、クソ!」

嘆いたのはシェゾ。だが嘆いたのは彼だけでなかった。

「……。」

呆然と立っているチコ。今まで全く動揺を見せたことのないチコが、

ここまで動揺した表情であったことには、不安さえ抱いた。

今、帰るべき場所を僕ら失った。どうしようもない……。

……

沈黙の空気が流れる。朝の楽しい時間がまるで嘘だったかのように……。

「がつ……へ……。」

小さな声を漏らしたのはチコであった。

「学校へ……。」

今度はさっきよりはつきり聞こえた。

「学校へ行きましょう。ここにいっても何もできません……。せめて……。」

その後の言葉は大抵予測がついた。

「そうだな。ここで落ち込んでいても何も始まらねえ。」

シエゾが切り出した。まさにその通りだ。まだ絶望感に浸るのは早すぎる。

「それぞれ思うところがあると思いますから……みんなで別れて行きましょう。」

チコが再び口を開いた。

こうしてボクらは別行動をとることになった。それぞれ心配するべき場所に行こうということで、バラバラになったわけだ。

ボクはルルーとチコと一緒に学校へ向かった。ユージ先生はどうなつたのだろう？学校のほかのみんなは？どこに？

そんな気持ちがボクにはあった。だが、すでに何も無い学校から僕の思うものを探すのは無理に近い事であった。

「……恐ろしい破壊力ね……。」

何もなくなるということを初めて体験した気がする。僕は目から流れるのを我慢していた涙が溢れ出す。

「なっ、なんで……。」

だれも声をかける事はできなかった。みんな同じ気持ちであったから。目の前にあるはずのものが無い。

大切な人がいない。こんな悲しみに耐えられず、ボクはその場でうずくまってひたすら泣いていた。

チコモルルも言葉を失い、目からわずかながらも涙を流していた。

「……あの……、」

涙をにじませた声でルルが言った。

「あの笛や楽譜と……関係があるんじゃないの？」

あの『てい……』とかいてあったやつか……。確かに無関係とは思いにくい……。

「その人が犯人じゃない？わざと物を落として私たちをおびき寄せ、学校から遠ざけて、」



ゲーム感覚で逃れられない選択を負わせたんだわ。そうとしか考えられないっ！」

考えてみればそうとも言える。この一連の騒動といい、何か前兆というものが存在している。

奴は、ボクらの目の前で呪文を放ち、ことごとく学校を潰した。帰る場所と大切な人を無くし、

しまいにはあざ笑うかのように去っていく。こんな行動を許せる？許せるわけないでしょ。

僕らが拾った『笛』と『楽譜』はきつと重要な役割を担うに違いがない。そしてかすかに見える『てい』の文字。

名前を示しているのであれば、その人に違いはないだろう。

ふとみると、チコはなにかいいかげんな顔をしていたが、同じ事を思っているのだと僕は解釈した。

僕ら九人は自然の流れで再び集まった。これからどうするか？ということ話を話し合うために。

鍵となる要素は『笛』と『楽譜』。そして『てい』の文字である。

これらを総合して僕らが決めなければならないことは一体何なのか。

「これらについてなにか知っている人はいる？」

ルルーが仕切るように言った。だが、唐突に見つけた材料の詳細を知る人はいないのが当然だ。

「わかんねえな……。」

「さすがにねえ……。」

みんなが発する言葉は似たようなものだった。

「もしかして……。あの伝説の……。」

物知りのチコが口を開いた。

「伝説のティナ・・・さんのもの・・・？」

「ティナさん？」

みんなが同じ疑問を發した。伝説といわれても全くわからないし、ましてやティナさんなんて名前を聞いたことすらない。一体だれなんだろう？ティナさんって。

「あの伝説の呪文を使用するティナさんです。フルネームは知りませんが・・・。」『てい』がつく名前といったらそれぐらいしか思いつかなくて・・・。」

「なるほどね。でも伝説とされる人がこんな悪事を起こすとは思えないわ。」

「ああ、でも可能性はあるよな。」

どちらも正論……。うーん。どっちなんだろう。

「でも、選択肢の一つとしては残す余地があるわね。ほかに知っている人はいる？」

ティナについては区切ったルルー。

「あとは知らなそうね。ならしょうがないわ。」

そういつて付け加えた。

「私たちの目標は的確よ。こんなことするやつらを野放しに出来るわけないじゃない。」

「ああ、わかってる。こんなことを平気でするやつは俺も許さない。」

「私もよ。」

「俺もさ。」

みんなが同意する。もちろん、僕も異論などない。力の差は歴然かもしれない。けど、それを理由に引き下がる僕らでもない。

しかし一人だけ、賛成しているような顔をしなかった人がいた。チコである。彼女は賛成の言葉も反対の言葉も述べなかった。

だが顔を見る限り、彼女はなにか違う心を持っているのではないかと僕は思った。だが、そのことは僕以外だれも気づかなかった。

「これからどこへいくのお？」

「そうね……。」

ここスカイサーズシティは四つの街に囲まれている。南にあるのが消えた街チュベントウンだがあとの三つは残っている

。西に位置するのがリョウタウン。東に位置するのがケッペルシ  
ティ。そして北に位置するのが名のごとくノースタウンだ。

どの街にも行くのは簡単だ。道を歩いていくだけでつく。だがそこ  
から外にでるとなると険しい道のりを歩む事になる。

ボクらはだれも行ったことがなく、その辺の知識はあいまいであっ  
たが、物知りのチコが言った。

「その三つの街の外側は広くティブの森で覆われているの。南のチ  
ュベントウンのさらに南には川があるだけ。

そのティブの森の抜けたところに、大きな城が二つあると聞いたわ。  
一つはギガ族の城なんだけど、もう一つは知らないわ。

最近の話だと、その二つは互いに戦争を繰り返していたんだけどこ  
こ最近はさっぱり。

もしかしたらその城のどちらかが街を破壊させてしまったのかもね。  
」

「なんで街を破壊する必要があるんだ？」

シエゾが聞く。

「それは自分の領土を増やしたいからよ。前まではどちらも互角の戦いだっただから、どっちも利益がなかったわけ。」

「ここらへんの街を支配すれば有利になるでしょ？南から攻めた理由は自分の城と挟むようにするため。」

「そうすれば威嚇行為にもなって手を出しづらくなるからね。」

「どっちなんだ？どっちを俺らは倒せばいいんだ？」

「それは情報収集しないとわからない。けど、今の私たちのレベルで倒せるほど簡単な敵ではないと思うわ。」

「もっと力をつけて挑まないと私たちの目標も達成されずに終わるわよ。」

「チコはずっとこのことを考えていたのかな？だからうかない顔をしていたのかな？それなら合点もいく。チコはこのことを思っていたのか。」

「チコの仮説が正しいのならば次に攻められにくいノースタウンにいくのが妥当ね。」

「ルルーが先陣きって言う。確かにそうだ。自分たちが二つの城に向かうためには通らなければならぬ道でもある。」

「では、ノースタウンへ向かいましょう。」

ウィッチの言葉についていくように、みんながノースタウンへ足を運び出そうとした。そこで思わぬ言葉が出てきた。

「待つて。」

そう言ったのはチョコであった。さきほどから感じていた有耶無耶感が一層増してくる。



「どうしたのよ?」

ルルーが問いかける。こういう時のルルーは言葉にできないほど怖い。僕なんか多分言葉も出ないだろう・・・。

「わたし……、いけないわ。」

急な出来事であった。今になって行けない?なんでさ?

「どうしても行けない理由があるの。」

「なによ?」

ルルーが一際怖く問いかける。チコは怖さのあまり、震えだした。

「いつ、言えない……。」

「なんでよ？あなたさっきから変よ？みんなの意見に賛成しているわけでもないような顔してるしね。」

僕以外にも見抜いている人がいた。チコがなにか思いつめていたことを。

「じっ、じめんなさい。どうしても言えないの……。」

チコの目から涙が溢れて出した。ルルーの威圧感に耐えられないのである。

その時であった。ボクらはとんでもない光景を見た。

「えっ？」

みんな疑問に思った。なぜって？

チコの体が次第に足のほうから消えていくのだから。

「えっ！待ってよ！」

ボクの叫びはチコにも通じた。けどチコは涙を流しながら消えていった。

#### 第4話：一人目

チコが消えたという出来事はボクにとっては重すぎた。チコの思っていた本当のことを聞き出したかったのだけど……。

一体全体なぜチコは消えたのか、訳のわからないままボクらはまた立ち尽くしていた。学校が消え、今度はチコが消え……。

一日でありえない出来事が二つも起きた。僕らが通常でいられるはずがない。

「なんで……今度はチコが……。」

みんな同じ疑問を抱いていた。あの優秀で物知り、そしておとなしい性格のチコが派手な演出で消えていった。

それはボクらにとって相当な大ダメージを意味する。これから城に乗り込もうとする今、大事な戦力を欠いてしまった。

それ以上に、親友のチコが行方不明になってしまった。

「……………」

シェゾの言葉を最後に全員がまた沈黙していた。そこにルルーが切り込んだ。

「このようなことが今日はほかにも起こるかもしれないわよ。今日をいつもの感覚で過ごさないほうがいいかも。

チコがいなくなったのは悲しい出来事だけど、それに立ち向かわなきゃ次に進めないわよ。」

.....。

でも、やっぱり。

そんな言葉が出ると思った。むしろ、ボクがそのような言葉を言

いたかった。

「そうよね……。ここで止まってちゃ意味ないよね。」

ウィッチがルルーに続いて口を開いた。その言葉をきいて、みんなも賛同する。

「そうだな。ここで挫けてちゃ前にすすめねえ。城のやつらを倒すこととチョコを取り戻すこと。その二つが今必要なんだ。それに向かって戦おうじゃねえか。」

シエゾが勇ましく言う。うん、ボクもこんなところで挫けてちゃだめだ！次に進まなくちゃ！

八人という集団行動で街に向かう。なんて奇怪な光景だが、人通りが少ないせいか、案外気にならない。

「  
」

鼻歌交じりで歩いているのはアーちゃん。学園的アイドルとまでは  
いわないが、

作者みたいな小さい子ファンの人にとってはたまらないキャラクタ  
ーであろう。ちなみに作者はロリコンではない。誤解しないように。

とまあ、さきほどは気にならないとはいったけど、こうしてみても見  
ると本当に変な集団だなあ……。

白いマントを着用する白髪とやけに勇者じみた服を着る剣士。ホウ  
キに乗る魔女に、鼻歌交じりの弓子。

そして威圧感ムンムンの武道家に音楽家のチビ。そして人魚に似て  
いる女の子が一人に僕つと……。つながりがなにもない気がする  
けど……。

「あれがノースタウン？」

十五分ほど歩いて見えてきたのは、なにやらなにもないようにみえ  
る街、というより村であった。

「なにか壊さなくても壊れているような街ね・・・。」

それほど質素な感じがする。本当に人などいるのだろうか？こんなところに。

「よし・・・この村を抜ければ・・・！」

「じゃあ、グループにわかれて情報収集をしましょ。なにも知らずに突っ込むのは馬鹿のやることだわ。」

シェゾの言葉にグサッと一撃ルルーの言葉。シェゾ・・・。たまには落ち着こうよ。

「じゃあ、適当に決める？」

ボクが質問したのが間違いだった。なぜなら



「俺はアルルがいい。」

でたよ・・・シェゾの名言。このストーカーめ・・・。

「じゃあグーチョキパーでわかれましょ。それが公平だわ。」

シェゾがやけにボクに視線を送ってくる。同じのをだせつてこと・・・だろう。あいにくボクに心眼や心理学の心得などまったくないので、

そのような熱い眼差しで見られても反応に困るんだが・・・。

「せーの、グーチョキパーでわかれましょ。」

はい、即決。

ここにグループが決まる。

グー組・・・シェゾ、ラゲナス、パノツティ。

チヨキ組・・・ウィッチ、セリリ。

パー組・・・アルル、アーちゃん、ルル！。

「ぬあつ。なぜアルル！貴様グーをださん！」

はいはい、そのくらいにしておいて。恨むならじゃんけんを開発した人を恨んでおくれよ。

「じゃあ、このグループでそれぞれなんでもいいから情報を集めてくること。いい？今日までならまだOKだからね。」

ルル！がそういつて、三グループはそれぞれ別の方向へ歩みだし、情報を集めることにした。

こちらはグー組こと男子グループ。彼らは誰も社交術を持っていない。いや、持てないというべきだろうか。持てたら持てたでなにか恐ろしいけど…。

「何を聞こうか？」

白髪の剣士が聞く。

「まずは城のことじゃね？」

黒髪の剣士のラグナスが答える。

ラグナス・ビジャシ。剣を主とする子供の魔導師。普段は子供だが力がたまると大人になるいわば変態動物。ちなみに今は中間である。

「そうだな。で、誰が聞く？」

「そりゃもうパノッティやオレが聞けるわけないんだからさ。」

白髪の剣士の方を二人が見る。なんとも言えない目で。

「・・・？」

白を切っているわけではない。ただ『ドンカン』なだけである。

「君でしょ。シェゾくん。」

二人の顔が微笑む。最初からこれが狙いか？こいつらめ…。二人は本当に楽しそうに微笑んでいる。しょうがない。俺が聞くしかないのか。

「さて、まずどこからあたろうか？」

ここで選択肢。

・学校

・道行く人

・住民

どれがよいだろう？多数決をとってみた結果。

・学校 一票

・道行く人 一票

・住民 一票

さて困った。

「全部あたらたら？」

笛を吹きながら簡単に言う。まあ、結論から考えるとその通りだ……。今どこかに行けなければならぬということはないし、情報は多いほうがいいからな。

「そうだな、じゃあまず道行く人に尋ねよう。」

というわけで道行く人に聞き込みを開始したわけだ。まるでテレビアナウンサーのような気持ちだな……。って、アンケートの意味ね

えよ！

「すみません、ちょっとお伺いしたいのですが。」

意外にもシェゾは丁寧な口調で聞く。社交術を持っているじゃないか。と感心でしたことが、どうやら間違っていたみたいだ。

「えーっと、そうですね。……で、つまり……なわけで……。」

これほど説明が下手な人は初めて出会ったかもしれない。と聞かれた人は思っただろう。

「すまん、わからねえ。」

聞かれた人はだいたいこのような返事をくれた。無理もないだろう。このようなチグハグな質問では。

何人かに聞いているがさっぱり情報がつかめない。言いたいことが上手く表現できないこちらの責任でもあるが。ってかそれしか考えられない。

「通りすがりに聞くのはダメだな。」

ダメだなんてあなたの責任なのに……しょうがないか。

「じゃあ住民に聞こうか。」

「ちょっと待った。シェゾ。」

止めに入っただのはビジャシ。

「聞こうとする内容を決めよう。でないといつまでも同じことの繰り返しだよ。何を聞きたいのか絞ろうよ。」

おお、ラグナスが初めてまともな意見を述べた。ラグナス本人も意外であったみたいだが。その証拠に発言した後は何やら浮かない顔をしている。

「そうだな、で、何を聞く？」

珍しく肯定的なシェゾ。いつもなら反抗するのに、この事件は重かったらしい。シェゾ本人の性格を変えてしまうとは。

一方でシェゾの問いに答える内容が考えられないラグナス。パノッティも考えているようだが、あんまり期待できそうにないようだ。

「二つの城のこと？」

ラグナスが言う。最もな意見だ。こんな状況では一つでも多くの情報があれば何よりだ。

「他には？」

「うーん、そうだね。ディブの森のことか？」

「うむ。そうだな。女の子についての…。」

「だめ。」

一蹴。

それからオレらは住民に聞くことにした。まず、住民を探さなくては…。通りすがりの人はいるのに、なかなか家というものがない。

ここノースタウンは本当に街なのか？なんとなく奴らが狙わない理由もわかる気がする。ここを狙ってもあまり得がなさそうだしな。

とりあえず少し歩いてみた。何も無いとはいえ、歩いてみるとなか



なか広い。どうやらさつき俺らがいたところは何かの広場のようだ。  
広場から離れてみるとちらほら住宅と思えるものが見えてきた。

「うわ……。」

思わず声に出したのはシェゾ。なにやら想像していた『家』とは違い……、うーん、これが家か？見た目最悪なのだが……。

よくみてみればインターホンがない。つまりこの街の家では、外から声で呼びかけなければならぬのだ。

これは案外恥ずかしいことというのは常識知らずの三人もわかって  
いた。

「ええい、悩んでも仕方ない！いくぞ！ラグナス、パノッティ！」

……聞き込みはシェゾに任せるよ……。つまり『路上で大声をだす』  
のだ。

「あの、すみません。」

まじすか、シェゾくん。シェゾが話し出した瞬間、ラグナスとパノッティは打ち合わせでもしたように逃げ出し……、

「ちょっとお伺いしてもよろしいですか？」

続けて聞くシェゾの両手にはしっかりとラグナスとパノッティの姿があった。読みはシェゾの方が上だったみたいだな。

とまあ、道行く人に聞くのと変わらない言葉遣いで大丈夫であろうか。そしてなんといてもボリユーム。

周りに人がいないからまだいいが、普通じゃ考えられない。この住民はいつもこんな感じなのかな？とにかく返事が心配である。

しかし、ここの住民は慣れたようにあっさり返事をくれた。

「はい。」

中から出てきたのはかなり太った俗に言うオタクフェイスの男性ではなく、正反対なかわいらしい女性一人であった。

女性というよりは見た感じ年頃は変わらない女の子という気がするが。

「シェゾさんとラグナスさんとパノッティくんだね？待っていました。」

？

三人の頭の上についた記号である。

「エッ？何で……。」

ところかまわず彼女は話し続ける。

「どうぞ中にお入りください。話は中でしましょう。」

いきなりそんな勧誘に乘せられても……と思うのが当然である。無論こいつらに『当然』や『常識』というものがあればの話だが……。

つまり

彼らは彼女の家へと入っていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2647d/>

---

Chase Dream

2010年11月16日11時02分発行